

全国在宅療養支援診療所連絡会 第1回全国大会 プログラム別詳細

タイトル	在支連全国大会記念シンポジウム 「今、なぜ在宅医療なのか？」
日時	平成26年3月23日(日) 9:30～12:00
会場	サピアホール(501)
座長	太田秀樹 (全国在宅療養支援診療所連絡会 事務局長) 新田國夫 (全国在宅療養支援診療所連絡会 会長)
演者	太田秀樹 (全国在宅療養支援診療所連絡会 事務局長) 横倉義武 (日本医師会長) 佐々木昌弘 (厚生労働省医政局指導課在宅医療推進室) 辻哲夫 (東京大学高齢社会総合研究機構) 新田國夫 (全国在宅療養支援診療所連絡会 会長)
企画の趣旨・概要	<p>わが国の在宅医療の歴史を振り返ると、居宅が医療提供の場として明確にいちづけられたのが1992年である。同時に老人訪問看護が診療報酬でしっかりと評価され、したがって、この年をわが国の在宅医療の夜明けと表現してもよいのではないかと考えている。</p> <p>そして、数年後の2000年には、家族に頼らない在宅療養を目指した介護保険制度が施行され、在宅医療という新しい医療の形態が、市民権を得てゆく。</p> <p>さらに、2006年 脱施設化を目指した障がい者自立支援法が、そして、がん患者の在宅ホスピスケアや緩和ケアを国の責任で推進すると条文で盛り込まれたがん対策基本法が施行された。</p> <p>このような社会的な背景のなかで、在宅医療は診療報酬上でもきわめて有利に評価され、法制度から強引に牽引されているにもかかわらず、国が思い描いたように在宅医療の普及推進がはかられたわけではない。</p> <p>しかし、国民も寿命で命を閉じる高齢者に対して、延命を目的とする病院での濃厚な医療に対して疑問をいただくようになり、医療施設で長寿を目指すというよりも、在宅などの生活の場で天寿を支える医療に大きな期待を寄せ始めている。</p> <p>さらに、都道府県は、5疾病・5事業と在宅医療として、第六期保健医療計画に数値目標を掲げて盛りこむこととなり、基礎自治体でもいわゆる「地域包括ケアシステム」の構築が重要な使命となっている。</p> <p>そして、日本医師会もかかりつけ医機能の中に在宅医療や在宅での看取りをミッションとして盛り込み、わが国の地域医療が大きく変わろうとしている。</p> <p>もはや、在宅医療は地域包括ケアシステムの中で語られる時代となっている。</p> <p>そこで、わが国の在宅医療牽引のステークホルダーの皆様にご登壇いただき、今なぜ在宅医療なのか、そして、在宅医療推進への課題を探り、在宅医療が当たり前の医療形態となるには、いったいどうすればよいのか、私たちにできることを具体的に提言してゆきたい。</p>

(敬称略)